

第 12 回日本 DOHaD 学会参加レポート

2024 年 10 月 13-14 日、札幌で開催された第 12 回日本 DOHaD 学会にオンライン(zoom)で参加しました。本学会は「ワンヘルスにおける DOHaD を考える」というテーマで開催され、ワンヘルスと DOHaD に関する基調講演やシンポジウムの後に優秀演題賞候補演題、一般演題の発表に移り、その日の最後には「どどメシプロジェクト」という学生の企画に関する発表がありました。基礎医学的な演題の発表に関しては、次世代の精神疾患や母体の腸内細菌叢に関することなど、自分のプロジェクトにおいても参考になる内容が多くあり、今後の研究における結果の解析、考察に活かしていきたいと考えています。また、臨床医学の演題や企画に関する発表に関しては、これまで生物学的な知識に基づく発表を聞いたり論文を読んだりする機会は何度もありましたが、社会情勢なども視野に入れた研究を聞く機会は少なく、興味深く聞くことができました。このような学会や個人での学習を通して自分のプロジェクトと関連のある内容の研究に関する知識を深めるとともに、生命環境学群生物学類から筑波大学大学院 人間総合科学学術院フロンティア医科学学位プログラム(医科学修士課程)に進学するにあたり、技術や知識を医療分野に活用することに対する意識も高めていきたいと感じました。

今回、私は「大脳皮質における *IL-17RA* mRNA 発現動態と ASD 動物モデルにおけるその変化」という演題で、Th17 細胞が産生するインターロイキン 17A (*IL-17A*) の受容体に着目し、マウスの発達段階ごとに、*IL-17A* 受容体サブユニットの mRNA 発現を *in situ* hybridization (ISH) で解析した結果を口頭発表しました。今回が初めての学会参加ということもありますが準備の見通しが甘く、スライドや発表原稿の修正が直前まで終わらなかったため余裕をもつことができませんでした。この点について、以降の学会、ラボセミナー、卒業研究発表会での教訓としていこうと思います。また、操作画面が表示されない、質問者の声が聞き取れないといったオンライン参加におけるトラブルもあり発表時には平常心を欠いてしまったことに関しては、不測の事態に備えて本番前の確認をより万全に行うというだけでなく、精神面に関しても万が一が一本番にトラブルが起こったとしても臨機応変に対応できるような心構えができるようにしようと思います。

最後に、発表の機会をいただいた日本 DoHAD 学会並びに、後藤貴文先生(北海道大学方生物圏フィールド科学センター)をはじめ第 12 回日本 DoHAD 学会運営に携わった先生方に心より感謝します。また、解剖学・神経科学研究室のスタッフ・学生の皆さんに発表の指導をいただきました。特に、中村賢佑さんと左中彩恵さんに、有益なコメントをいただきました。この場をお借りして感謝します。

2024 年 10 月 18 日(金)

筑波大学 医学医療系 解剖学・神経科学研究室

筑波大学 生命環境学群 生物学類 4 年

A.K.

